

マイナビ 企業研究&インターンシップ完全ガイド 建築・土木系学生

<http://jobebook.mynavi.jp/library/19/construction/#page=21>

“日本発の安全管理をインド人の手で広めてほしい”

私が取締役社長を務めるインド現地法人は2014年に設立し、ようやく事業は軌道に乗ってきたと感じています。現在の従業員数は160名ほどで、私ともう一人の役員を除いて従業員は全てインド人。現在は200名超への拡大をめざしているところです。

インドのことを語る際に、「あれもインド、これもインド」という言葉があります。つまり、インドという国は多様性があるということ。発展途上国らしい部分もあれば、先進国と変わらない面もあります。人材についても同様で、私の会社の従業員はトップクラスの大学を出ている人が多いのですが、工事現場の「ワーカー」と呼ばれる人々になると、満足な教育を受けていない人も多く、識字率も低いのが現状です。メトロ、つまり地下鉄を建設する巨大なプロジェクトになると、人員の規模は約4万人にもものぼり、そのほとんどがワーカーです。そして、インドと日本では工事や安全に対する意識もまったく違うため、日本では考えられない問題が起こることも少なくありません。

では、すべてのやり方を日本形式にすればいいのかという、それは違います。かといって、現地のやり方そのままでもいいわけでもない。私は、インド現地法人の社長と兼任して、メトロ建設工事のプロジェクトマネージャーとしても働いています。常に心がけているのは「日本を持ち込まない、でも、日本を忘れない」ということ。

日本のやり方を押し付けるのではなく、インド人が主体となって安全管理を行えるようになってほしい。これは、私たちが日本から出張して行くのではなく、現地法人として事業を行う理由でもあります。会社の経営についても、ゆくゆくはインド人スタッフの手によって動かしていくことを目標にしています。

土木女子を襲った苦難 壁があるなら乗り越えよう

昔から「大きなものをつくりたい」と考えていた私は、大学でトンネル工学を学びました。学部で初めて女子学生で、私が入学したときには女子トイレすらなかったほど、当時の土木工学は男性の世界でした。就職活動においても苦労しましたが、恩師の協力もあり、何とか某ゼネコンに初の女性トンネルエンジニアとして就職。ですが、希望していたトンネル工事の現場には参加することはできませんでした。日本の山には女の神様が住んでおり、女性が山に入ると神様が怒り、事故が起きるといふ言い伝えがあったのです。当時



日本の安全管理を世界へ

諦めなければ 道は拓ける

近年急速に経済成長が進む一方、深刻な交通渋滞が社会問題化するインド。地下鉄工事を通じて都市環境の改善を支えているのが、土木エンジニア・阿部玲子さん。日本のプロジェクト管理力の高さは、世界に誇れると力強く語る阿部さん。そんな日本のプロジェクト管理を世界に発信する阿部さんの姿を追いかけてみよう。

Text: Koujiro Tamada Photo: Shuhei Fujita, Kaoru Koide

株式会社
オリエンタルコンサルタンツグローバル
インド現地法人 取締役社長

阿部玲子

Reiko Abe

1963年、山口県生まれ。山口大学工学部卒業。神戸大学修士課程修了。95年からノルウェー工科大学(現ノルウェー科学技術大学)大学院に留学。留学後、台湾高速鉄道(台湾新幹線)トンネル工事を担当。2007年からインドに転任し、首都ニューデリーなどの地下鉄建設工事に従事。2014年博士号取得。2014年10月からインド現地法人取締役社長に就任。

参加するようになったのです。

インドでメトロを建設するということ

2007年にインドのニューデリーにあるメトロのトンネルエンジニアになったとき、私があいさつすると現場には大きなよめきが生まれました。女性のトンネルエンジニアなんて考えられないことだったんですね。ですが、私は安全管理において徹底的に厳しく当たり、ヘルメットをかぶっていないワーカーがいれば、現場から追い出すこともあります。すぐに私は彼らから「マダム」と呼ばれて、一目置かれるようになりました。

また、私たちが行うメトロ工事の際には、街の中の道路を専有することになるため、渋滞が発生します。ある日、私は大渋滞の中、3輪タクシーのオートリキシャに乗っていました。なかなか進まない渋滞にうんざりしている中、運転手がこちらを振り返り、工事現場を指さしながら誇らしそうに言ったのです。「マダム、これが俺たちのメトロだ」と。つまり何か文句を言うのだと思っていたので、びっくりしましたよね。彼は私が工事に関わっている人間とは知らなかったのですが、私たちがつくっているメトロは、彼らにとって誇りでもあったのです。メトロがあるということは、先進国の仲間入

りでもありますから。自分が関わっている仕事の意義を感じられた出来事でした。

世界に誇れる日本の安全管理をインドへ

安全は目に見えず、それゆえ簡単に意義が理解されるものではありません。安全意識を高めるために必要なことは、繰り返し努力だけではない。安全意識の低い国で、かつ、安全意識を繰り返し、かつ厳しく発信し続けることで、徐々に安全意識は浸透してきました。

今では、私のもたらしたインド人のエンジニアが、かつての私と同じことを現場で話してくれています。そんな様子を目にする、日本の安全管理が私の手を離れ、インドで広がり始めていることにたしか



な手応えを感じます。

あるとき、安全管理向けプロジェクトの一環として、現場の人々の受け止め方を調査するため、全ワーカーに対してアンケートを実施したことがありました。インドは識字率が低いので、通訳を介して言葉でアンケートを行ったのですが、一人のワーカーが突然泣き出したのです。「僕の意見を聞いてくれるなんて」と。それまで、彼は自分の意見を求められたことなんてなかったのだでしょうね。安全管理が押し付けではなく、彼らのためにやっているということが伝わっていたことがとてもうれしかったです。

日本は技術力の高い国だと言われます。しかし、実際は技術だけでなく、その技術を生かすための管理や維持の手法も優れているのです。そのレベルの高さを知っている身からすると、管理能力や維持力も世界に発

信していききたいと考えています。

諦めないとは裏切らないということ

私の強みは、諦めないことです。私はこれまで壁が多かったけど、どのように壁を破っていくのか、あるいは避けていくのか、その選択はたくさん持っていると思います。昔、祖母から言われた言葉があります。「四面楚歌の状態でも、上は空いているよ」と。つまり、手だてがないように見えても、乗り越える方法は必ずあるということですね。乗り越えるのに時間がかかりそうな壁があったとしても、絶対に諦めない。数年かけて乗り越えた壁があれば、20年かかったものもあり、今でも乗り越えようとしている壁もあります。

大学の同級生たちは皆、私が今までの業界に残ることは思っていないだろう。ですが、それまでに応援してくれた人々を裏切るわけにはいかないという気持ちで、今まで歩んできたことができた。

例えば、アーメダバードのメトロ建設計画にプロジェクトマネージャーとして採用される際には、女性性がインドでマネージャーを任せられた前例はないからと、不採用になりそうになりました。それが私の初めてのプロジェクトであれば、きっと採用されなかったでしょう。ですが、

私が私に生きてくれるのも、食欲が私に技術や試験、管理手法やプロジェクトの運営方法を学ばうとしているから。シビアですが、仮に私の引き出しが空になってしまったら、おそろしくついてきてはくれないでしょうね。

「自分らしさ」のひとつとして、常に自分を魅力的に見せるために、自分の引き出しを増やすことは意識しておいてほしいと思います。引き出しは、人によっていろいろな形がありますし、時間とともに流動していくものでもあります。

私は自分のことを努力家だとは思っていませんが、努力しなければ次がない状況にいたことはたしかです。誰でも追い込まれたことがある。私の場合、追い込まれたことが、ある意味「幸運だった」と言ってもいいのかもしれない。

壁があるほど、後で得られるものは大きいはずです。不可能なことなんて何もありません。学生時代の私は、決して優秀な学生ではなく、英語も全然できませんでした。それにもかかわらず、そんな私が今では英語を使つて海外で仕事をしているくらいなんです。これから社会に出る方々には、「海外はあなた方の挑戦を待っていますし、あなた方も海外に貢献できるチャンスがたくさん持っています。だから、「諦めないで」と一番に伝えたいですね。

“壁があるほど
後で得られるものは大きい”



※ 藤田修平氏撮影

自分らしさはあなたの価値になる

私も若手のエンジニアや女性のエンジニアからキャリアの相談を受けることがあります。そのような時に、私は「こうしたらいい」とは言わないようにしています。その人には、その人なりのやり方があるはずですから。だから、「まずはやってみましょう」というのが私のスタンス。何より、やってみる姿勢を見せないことには、人は手を差し伸べてくれません。

そして、「私はこういうキャラクタースタイル」とアピールしていくこと。ただ助けってもらうだけでなく、ギブ・アンド・テイクでなければ、人の縁はつながっていきません。それはインドでもまったく同じことで、彼ら



※ ページ下の写真はすべて藤田修平氏撮影となります。